

## 研究資料

## 国木田独歩『忘れえぬ人々』に描かれた「風景」の性質

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2011年10月13日受付; 2012年1月26日受理

The character “landscape” in *Unforgettable People* (Wasurenu hitobito)

Naokata Okajima

Laboratory of Green Space and Environmental Information,  
 Minami Kyusyu University, Miyakonojo,  
 Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 13, 2011; Accepted January 26, 2012

Referring to Kojin Karatani's *Origins of Modern Japanese Literature*, this paper interprets Kunikida Doppo's *Unforgettable People* and reveals the following: Karatani pointed out that Doppo discovered “people as landscape” in the novel. However, a comparison of Karatani's statement with the text revealed that a more apt observation could be that Doppo created characters who were inextricably linked to the landscape. Consequently, the landscape was inevitably described throughout *Unforgettable People*. The text contains characters who appear when the protagonist experiences certain negative emotions. These characters appear at an opportune moment to transform these negative emotions into positive ones.

Key words: Kunikida Doppo, *Unforgettable People*, Kojin Karatani, landscape.

## 1. はじめに

国木田独歩（以降国木田）の『今の武蔵野』（1989年）（単行本『武蔵野』の出版の際に『武蔵野』と簡略化された。本論では小編『武蔵野』と表記する）は、それまであえて注目されることがなかった東京郊外の風景のよさを読者に知らせた著名な文学作品である。雑木の庭の発祥に関わる重要な著書であると筆者は考えている。東京の西郊外に当たる場所では江戸時代からその風景（ナラの木からなる落葉林）は存在していたにも関わらず、文学表現の対象にはなっていなかった。それは近代になってはじめて発見された風景であった<sup>1)</sup>。彼がその風景を注目すべきであると気づいたきっかけには、ロシアやイギリスの文学の影響があったことは本人の述懐によって知られるところである。評論家の柄谷行人は、『日本近代文学の起源 原本』<sup>2)</sup>の中で、国木田がこのような「風景の発見」を成し遂げることができた背景を、より大きな歴史的・社会的文脈から説明している。柄谷に拠れば、国木田独歩は以下のように独特な文学を生み出した作家である。

私はまず近代文学の起源を風景（客観）の側から考えたい。それはたんに外的な客観の問題ではない。たとえば、国木田独歩の『武蔵野』や『忘れえぬ人々』（明治31年）においては、ありふれた風景が描かれている。ところが、日本の小説で風景としての風景が自覚的に描かれたのは、これらの作品がはじめてであった。しかも、『忘れえぬ人々』は、そのような「風景」がある内的な転倒によってしかありえなかったということを如実に示している。

（定本<sup>3)</sup>、第1章：風景の発見）…①

こうした多義性のゆえに、たとえば国木田独歩はロマン派か自然主義派かといった議論が生じるのだが、彼の多義性は—ルソーの多義性とある意味で似ている—まさに彼がはじめて新たな地平に立ったところからきているとあってよい。ヴァレリーがいうように、ある一つの事柄で新たな視野をひらいた者は一挙に多方面の事柄が視える。

（定本、第2章：内面の発見）…②

日本の近代文学は、国木田独歩においてはじめて書くことの自在さを獲得したといえる。

(原本<sup>2)</sup>, 第2章: 内面の発見) …③

柄谷は国木田独歩を特異な文学家としてみなしているばかりでなく、日本において近代文学の起源となる作品を生み出した文学家として扱っている。上に抜粋したのは、同著の中で、国木田独歩について書かれた記述のうちのごく一部である。国木田の独自性について指摘するために柄谷は、「定本」において第1章と第2章にまたがる94項のボリュームを割いている。そこには、次々とひらめく柄谷の連想のほとばしりが記されている。そのほとばしりは、密度高く盛り込まれた固有名詞（文芸世界に関わる人物の名前が主である）とそれらの固有名詞が持つ特徴の説明によって表現されている。第1章（全32ページ）の文中には以下の人物が登場する。

夏目漱石、ロマン・ヤコブソン、パスカル、シェークスピア、スウィフト、スターン、バフチン、宇佐美圭司、フェノロサ、松尾芭蕉、杜甫、柳田国雄、井原西鶴、パノフスキー、カッシーラ、カント、ポール・ヴァレリー、レオナルド・ダヴィンチ、ルッター、ファン・デン・ベルク、ルソー、志賀重昂、エドモンド・バーク、シクロフスキー、北村透谷、中村光夫、ハロルド・ブルーム、T. S. エリオット、サルトル、レヴィー＝ストロース、ワーズワース、ヘーゲル、小林秀雄、吉本隆明（原文のまま）

これらの華麗なる固有名詞は、国木田の特異性を明らかにするために使われた素材群として見る事が出来よう<sup>5)</sup>。多くのものを参照することによって、国木田の特異な位置を相対的に定めようとする試みである。第2章も同様である。

柄谷は、前述①に示したように国木田独歩の特異性について述べる際に、小編『武蔵野』と『忘れえぬ人々』を用いた。表1に示すように<sup>6)</sup>、これらは両方とも1898年に発表されたが、小編『武蔵野』の方が3ヶ月先に発表された。柄谷は、国木田がこれらの小編の中で「風景」を発見することができた前提を、〈ある種の内的な転倒〉によって生じたものとして解説している。

柄谷は小編『武蔵野』に示された〈「風景」の発見〉については具体的には語らず、『忘れえぬ人々』の中からのみ、具体的なフレーズを抜粋しながら証明を試みる。そこでは、〈この部分にそういう読み取りが可能な箇所があるのではないかと〉ということ指摘するだけで、引用箇所を読めば、内的な転倒が現れているのは自明だとしている。しかし筆者は、引用された箇所を柄谷が意図したように読むためには、説明が必要であると考ええる。柄谷が示した様々な解釈のアイディアは、多くの文学絵画の作家を参照するために飛躍ある文体で提示されており、それぞれの部分を注視して見ると、意味がとりにくいところがある。それは、アイディアのきらめきをそのままの形で表そうとしているからであろうし、評論家特有の「書き方」に関係するところであろう。文中で柄谷が伝えようとしていることの意味は大きなスパンでは分かる。しかし、このままでは、柄谷が表現しようとしたかったことは、柄谷が表現したかったことで留まる。これをじっくり追っていくこ

表1. 単行本『武蔵野』に集録された小編の初出年月

西暦	明治	時期	作品名	備考
1888年	21年		ツルゲーネフ著、二葉亭四迷訳『あひびき』	雑誌『国民之友』
1893年	26年	2月～	日記：『欺かざるの記』書き始める	
1896年	29年	11月	『たき火』	雑誌『国民之友』
		12月	『星』	雑誌『国民之友』
		～5月	日記：『欺かざるの記』書き終わる	
1897年	30年	8月	『源叔父』	雑誌『文芸倶楽部』
		11月	『おとずれ』	雑誌『国民之友』
		1月～2月	『今の武蔵野』（小編『武蔵野』）	雑誌『国民之友』
		3月	『糸くず』	雑誌『国民之友』
		4月	『忘れえぬ人々』	雑誌『国民之友』
1898年	31年	5月	『詩想』	雑誌『家庭雑誌』
			『まぼろし』	雑誌『国民之友』
		8月	『鹿狩り』	雑誌『家庭雑誌』
		10月作	『河霧』	雑誌『国民之友』
			『わかれ』	？
1900年	33年	12月	『置土産』	雑誌『太陽』
		10月	『郊外』	雑誌『太陽』
		11月	『小春』	？
1901年	34年	3月	単行本『武蔵野』	民友社

とで、なぜ国木田が武蔵野の風景の美を発見することができたかという問いに対して、説明しうる新しい答えを導き出した。

そこで本論では、柄谷が国木田の『忘れえぬ人々』で指摘した内容を検証しつつ、実際に『忘れえぬ人々』を参照することによって初めて見えてくる要素を明らかにして、国木田が武蔵野の美を発見することができた要因が何か、そこに描かれたものが何であるかについて一定の知見を得ることを目的とする。

そのため、2章から5章まではオリジナルテキストである国木田の『忘れえぬ人々』<sup>7)</sup>を、柄谷の論考を参照しながら読み解いていく。次に、6章、7章では、前章で現れた特徴を意識して小編『武蔵野』を読み直し、国木田が新たな風景を発見することができた理由を推測する。8章で全体を総括する。

## 2. 『忘れえぬ人々』に書いてあること

多摩川の二子の渡しをわたった宿場の中ほどに、亀屋という旅人宿がある。そこで、大津という文学者と秋山という画家が出会う。ナレーターは二人が無名の人物であることを明示している。「不思議にも同種類の青年がこの田舎の旅宿で落ち合った」とある。「不思議にも」とあるところから、二人はもともと知り合いではなかったが、この旅宿で偶然出会って、何かをきっかけに話し合うようになった模様である<sup>8)</sup>。この二人が、日が暮れてから11時過ぎる時刻まで、美術、文学、宗教についてしゃべりあっていたが、もうそろそろお開きにしようという頃、秋山がふと大津の書いた原稿らしいものを見つけて取り上げた。表紙に『忘れ得ぬ人々』（「得ぬ」の部分に漢字であることに注意。）と書いてある。秋山はそれを読みたがったが、大津はそれをしりぞけ、これを読むよりは自分が内容を話して聞かせてあげようと言う<sup>9)</sup>。大津の解説によると、「忘れ得ぬ人」とは「必ずしも忘れてかなうまじき人にあらず」という人である。ユーモラスな表現である。意味がすぐには分からない、もってまわった感じの言い回しである。対象を直接平易な言葉で語らず、否定形を重ねることで婉曲的に表現している。この言葉の意味は大津が解説してくれるので読者は助かる。『親とか子とかまたは朋友知己そのほか自分の世話になった教師先輩のごときは、忘れてかなうまじき人』である。一方、『恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であって、本来いうと忘れてしまったところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人』が『忘れてかなうまじき人にあらず』である。大津にとっては、そういう人が「忘れ得ぬ人」である。大津はそういう人物の事例を三つ挙げて詳しく説明している。

- 1 例目. 瀬戸内で見つた磯を漁る男
- 2 例目. 熊本阿蘇の馬子
- 3 例目. 四国の琵琶僧

この三者がどんな人物であったかは大津の口から詳し

く語られる。この三者以外にも、北海道の鉦夫、大連湾の漁夫、番匠川の舟子、なども書きかけの草稿『忘れ得ぬ人々』の中に書いてあると大津は秋山に伝えたが、それらについての説明は特になされていない。上に抽出した三例はいずれも、大津にとってそれまで知らなかった人々であるが、旅の途中でふと出会った対象である。

## 3. 磯を漁る男から柄谷が読み取ったことの検証

柄谷は、上の1例目の「磯を漁る男」（柄谷は「島かげにいた男」と表現した）とは「風景としての人間である」と述べる。国木田の『忘れえぬ人々』の文中から引用しつつそれを説明している。柄谷が引用したのは、大阪から汽船で瀬戸内海に渡ったときの出来事である。以下に示す。

ただ其時は健康が思はしくないから余り浮き浮きしないので物思に沈むで居たに違いない。絶えず甲板の上に出て将来の夢を描ては此世に於ける人の身の上のことなどを思ひ続けていたことだけは記憶している。勿論若いものの癖で其れも不思議はないが、其処で僕は、春の日の閑かな光が油のような海面に融け殆ど漣も立たぬ中を船の舳先が心地よい音をさせて水を切て進行するにつれて、霞たなびく島々を迎へては送り、右舷左舷の景色を眺めていた。菜の花と麦の青葉とで錦を敷たような島々が丸で霞の奥に浮いているように見える。そのうち船がある小さな島を右舷に見て其磯から十町とは離れていない処を通るので僕は欄に寄り何心なく其島を眺めていた。山の根がたの彼処此処に背の低い松が小杜を作っているばかりで、見たところ畑もなく家らしいものも見えない。寂として淋しい磯の退潮の痕が日に輝って、小さな波が水際を弄んでいるらしく長い線が白羽のように光っては消えて居る。無人島でない事はその山よりも高い空で雲雀が啼ているのが微かに聞えるのでわかる。田畑ある島と知れけりあげ雲雀、これは僕の老父の句であるが、山の彼方には人家があるに相違ないと僕は思ふた。と見るうち退潮の痕の日に輝っている処に一人の人がいるのが目についた。たしかに男である。又た小供でもない。何か頻りに拾っては籠か桶かに入れて居るらしい。二三步あるいてはしゃがみ、そして何か拾っている。自分は此淋しい島かげの小さな磯を漁っている此人（下線岡島）をぞっと眺めていた。船が進むにつれて人影が黒い点のようになって了った。そのうち磯も山も島全体が霞の彼方に消えて了った。その後今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度此の島かげの顔も知らない此人を憶ひ起したらう。これが僕の『忘れえぬ人々』の一人である。

この長い引用をして、この島かげにいた男は、人というより風景であること、大津が挙げたほかの忘れ得ぬ人々も、すべて「風景としての人間」であることを



柄谷は述べている。確かに、船が進んでいくに連れて見えてくるものがどんどん変わっていく中で、二三步歩いてはしゃがんで何かを拾い、籠に入れるという動作を繰り返しているこの男は、その繰り返しの動作だけが遠くから観察できるに過ぎない。それもつかの間、すぐに小さい点になって消えてしまっただけの人間である。それは、見えたと思った瞬間からすでに小さく、その人間の顔の表情などは全く見えないし、話しかけることも無意味なほど遠い距離に見えた対象であろう。その描写はこの直前の箇所、「島」について描写している表現とさほど変わらない。だから、この「人間」（磯を漁る男）は風景における他の要素とほぼ等価な状態でドライに描かれているという意味で「風景としての人間」と呼ぶことができそうに見える。人間からその個人の持っている個性を取り去ってその動作だけが注目の対象になるというのは、何かが変わる。

この指摘に続いて柄谷は、このような奇異さが特に『忘れえぬ人々』の末尾に端的に現れているとしている。それは、二年後、大津の手元にあった『忘れ得ぬ人々』の原稿（果たしてその後完成したのか完成していないのか分からない）の最後に『亀屋の主人』が付け加えられていて、『秋山』の名前がなかったという箇所である。通常なら、長時間熱く語り合った秋山は、忘れえぬ人の一人として名前を連ねても良さそうなものであるが、そうはならなかった。秋山とは、たとえ一晩であっても熱く語り合い、双方向コミュニケーションが行われたが、『亀屋』の主人の方は、いってみれば、お客である大津を無愛想に迎え入れた宿屋の主人である。その宿屋の主人は、大津に対し特に深いコミュニケーションを求めなかった。たしかに主人は親切そうに大津に向かって、

「早くお湯を持ってこないか。」へエ随分今日はお寒かったですよ、八王子の方はまだまだ寒うございます。」

などという言葉かけたが、それは言葉上の愛想はあっても、全体としての愛嬌はない。客が足を拭ききっていないのに、「七番のご案内しな！」と割り当てた部屋への案内を係の者に命じ、そのあとは何のあいさつもしなかったという。そんなぶっきらぼうな主人が、秋山よりも忘れられないというのは奇妙ではないかということである。『忘れえぬ人々』の末尾には、

その後二年経った。大津は故あって東北のある地方に泊まっていた。溝口の旅宿ではじめてあった秋山との交際は全く絶えた。ちょうど、大津が溝口に泊まった時の時候であったが、雨の降る晩のこと。大津は独り机に向かって瞑想に沈んでいた。机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあって、その最後に書き加えてあったのは、『亀屋の主人』であった。

『秋山』ではなかった。

とある。柄谷は、この部分に関して、

「独歩は風景としての人間を忘れぬという主人公の奇怪さを最後の数行においてあざやかに示している。」

としている。深く関与しなかった人間のことをより克明に覚えているということは確かに奇妙と言いうる。しかし奇妙さは別のところにも見受けられる。それは、最後に書き加えてあったのが「亀屋の主人」であったということの奇妙さを、国木田自身が気づいていることである。国木田は、読者がこの箇所を奇妙なものとして捉えることができるように『秋山』ではなかった。」という文をわざわざ一番最後に持ってきてこの部分が読者の頭に残るように演出している。大津が「忘れえぬ人」として亀屋の主人を書き加えたというのはどこか奇妙な感じがしませんか？と国木田が誘いかけている。すなわち、国木田には、『忘れえぬ人々』が提示しているこの価値の転倒が見えている。

#### 4. 馬子と琵琶僧について

1 例目の、瀬戸内で見え忘れないものは、〈磯を漁る男の動きと、消えていくその姿〉であった。では、2 例目や3 例目で国木田が指摘した忘れえぬものは何であったのであろう。2 例目の熊本阿蘇で見た忘れられないものは「壮漢（馬子）の後ろ影」である。馬子のうたった「宮地やよいところじゃ阿蘇山ふもと」の俗謡が大津の心に与えた影響が強くあったので、大津の目はその若い馬子に引き寄せられた。若者はすぐ近くまで近づいてきたが、大津と視線は合わなかった。馬子のたくましい体の黒い輪郭だけが目に残ったという。3 例目に見た忘れられないものは、〈琵琶僧の奏でた琵琶の悲しげな音の効果〉である。以上のように忘れられないと言っている対象は、いずれも人そのものではない。しかも3 例目は、視覚的なものというよりはるかに聴覚的なものに注意が向いており、音そのものばかりではなく、その音が想起させるイメージ（この人が奏でる音が、「巷の人々の心の底の糸を自然の調べとしてかなでているように」思えるというイメージ）も忘れられないものになっている。これらの内容を見ると「風景」の範疇を超えているものがあると考えられる。

通常の意味で言えば、「風景」とは視覚情報が主となる。したがって1 例目の「磯を漁る男」は、風景としての要素を持っている対象と言えよう。しかし、2 例目、3 例目に登場する「忘れえぬ人々」は、視覚情報の世界を越えてしまった内容が忘れえぬ要因になっている。その意味から、柄谷が、

語り手の大津は、ほかにも「忘れえぬ人々」を沢山例にあげるが、それらはすべて右のように風景としての人間である。（下線筆者）

と指摘しているのは、十分な表現ではない。より詳しい説明が必要と思われる。では一体忘れえぬ人々で描かれているものは何なのか。

## 5. 忘れ得ぬ人々とは何か

国木田は、

「これが僕の『忘れ得ぬ人々』の一人である。」

(磯を漁る男の場合)

「『忘れ得ぬ人々』の一人はすなわちこの壮漢である。」

(馬子の場合)

「『忘れ得ぬ人々』の一人はすなわちこの琵琶僧である。」

(琵琶僧の場合)

と、言う具合に、忘れぬ対象が<どんな人であるか>(傍線筆者)を明示する表現法を使っている。この点で、国木田の描写もまた、矛盾をはらんでいる。上で指摘したように読めば、ここで指摘しているものは、本当に「人」のことを指しているのだろうかという疑問が湧く。ここで国木田が「人」と呼んでいるものは、確かにそこに登場した人に関係するものであるが、人そのものではなく、人が作り出している雰囲気やその人が運んできた風やその人の存在がもたらす効果であったりする。登場するのは、心のイメージ世界の中に特別な作用をもたらす人々である。しかし、それらの人々自身は、その人たちにとっての日常生活を送っているに過ぎない。旅人に向けて特別なパフォーマンスをしているわけではない。

これらの「人々」は、極めて長い説明とともに表現されている。以下がそれぞれの『忘れ得ぬ人々』を説明する際に国木田が費やしている文字の量である。

(磯を漁る男の場合) …24行×43文字=1,032字

(馬子の場合) …59行×43文字=2,537字

(琵琶僧の場合) …26行×43文字=1,118字

つまり、磯を漁る男であれば誰でも良いというわけではない。同様に、馬子であれば誰でも良いというわけではない。きわめて特殊な条件を持った磯を漁る男であり、馬子であり、琵琶僧である。多くの文字数を使って表現しなくては伝えられない、限定性の強い人のことを主人公は「忘れ得ぬ」と呼んでいる。ここでの磯を漁る男、馬子、琵琶僧は匿名の存在であり、それぞれの人々がどんな性格を持っているかはどうでもよいが、しかし、ここで表現された背景と切り離されてしまっはまづいのである。1000字以上の附帯条件がついている「人」とは何か。特殊な状況と一体になってしか表現できない「人」とは、かなり特定化された人間である。

国木田は、さまざまな附帯条件をあくまで<人>を描写するために使っているという建前を崩していない。だから、国木田の側に立って読むなら、<特殊な前提条件もしくは背景の中から立ち現れた人>のことを<忘れ得ぬ人>と呼んでいる。その人のことを表現しようとすれば、様々な景色のことを描かずにはいられない、そういう人である。あえていえば<風景と一体化したものとしてしか表現できない人>のことである<sup>10)</sup>。このことをモデル図で表現すると、図1に示したよう

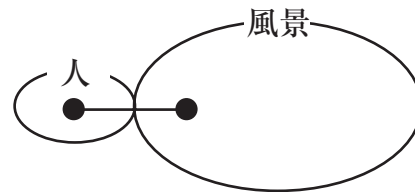


図1. 人と風景の一体化したもの

になるのではないかと。図1では、<人>と<風景>は包含関係ではなく、別のものではあるが、両者がぴったりと結合していることで、この<人>のことを描こうとすると、風景のことに触れずには取り出すことができないというニュアンスを示している。ぴったりとくっついていることを示すために●—●という記号をつけた。緊結されていることを示す記号である。図1では、叙述の量として、<人>(忘れぬ人)に関する部分が少なく、<風景>に関する部分の方が多いことを楕円の大きさに表している。しかしまた、ここでいう<風景>というものは、<風景>といってもよいが、<前提条件>、<背景>、<附帯状況>、<状況説明>などといえるような性質のものなのである。

表現方法として非常に特徴的なことがある。1例目の「磯を漁る男」の場合、『(かぎかつこ)から始まる説明の段落は1個だけであるが、2例目の「馬子」の場合、その馬子を説明するための段落が11個ある。3例目は、4個である。そこで、この2例目の「馬子」という「忘れ得ぬ人」を知るためには、秋山(もしくは読者)は、ずいぶん長い説明を辛抱強く聞き続けなければならない。大津が、これらの忘れ得ぬ人とどこでどんなふうに出会ったかの説明は、一息に言い切れないほど長い。さらに2例目では、実際に「馬子」に出会ったのは、月の出ている夜のことであるが、大津の説明は、その前日の朝早くから自分たち(大津と弟)がどんな行動をしていたか、というところから始まる。そして、

4段落目では、

「ところでもっとも僕らの感を惹いたものは九重嶺と阿蘇山との一大窪地であった…」(下線岡島)

5段落目では、

「いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようか」という説も二人の間に出たが、先が急がれるのでいよいよ山を下ることにして…」(下線岡島)

などという話がある。「ところで」という言葉は、通常は話題が変わるときに用いられる言葉である。忘れぬ人について話をしているのに、4段落目は、「ところで」と言って、男体山の噴火口との違いを眼前の窪地の特徴と対比させて述べている。また、5段落目は、旅の同伴者である弟との会話(「いっそのこと〇〇しようか、いややめておこう」というような会話)の内容が記されている。このような叙述は、忘れ得ぬ人の説明にとっ

て必ずしも必要ではないのではないかと思われる内容である。しかし、これらすべての附帯状況があったところで出会うことになったからこそ、忘れ得ぬ人々が出現したのである。仮に読者が大津の語り始める話にじっと耳を傾けたとしたなら、「忘れ得ぬ人々」とは、登場しそうでなかなか登場しない、じれったい感じやもったいぶった感じのする存在であることに気づくであろう。それは叙述上のユーモアである<sup>11)</sup>。しかも話の中で、ある人物が現れた瞬間には、単に通りすがりの人なのか忘れ得ぬ人なのかの区別はつかない。「これがその一人である」と、大津がピリオドを打つことによってはじめて「この人がそうだったのか」と分かる。

忘れ得ぬ人々とは、親しく付き合っている人のことではなく、どれも旅先ですれ違った人々である。それらの人々と情の濃い付き合いが起こることはない。1例目は海水を隔てた向こう側にいる磯を漁る男であり、2例目は近づいてきたが自分に見向きもしない馬子であり、3例目は巷の人は一人も顧みないが清泉のように感じられる琵琶僧とその琵琶の音である。いずれも距離感があって、自分に向かって直接的に語りかけてこない、フィードバックのないコミュニケーションしかできない状態の人々である。

忘れ得ぬ人々が場面の中で登場するようになる前に、国木田が用意した前提条件とは途中の風景の描写を略すと以下のようなものである。

磯を漁る男の場合：(保養のために東京の学校を引き上げ、瀬戸内海を船で移動しているとき、自分の健康が思わしくないからあまり浮き浮きしないで物思いに沈んでいたところ)、船から見えてきた磯を漁っている人。

馬子の場合：(阿蘇の旧噴火口や世界最大の噴火口の旧跡を訪ねて、そのすさまじさや壮大さに打たれ、疲れた足を引きずりながら宮地という宿駅を目指して歩いていたとき)、後ろから唄をうたいながら近づいてきた馬子。

琵琶僧の場合：(全くの旅人として、四国の港の浜や町を散歩していると、そこで見たまちの人々のにぎやかで忙しそうなる光景を、異様な感で眺めていたとき)、聞こえてきた琵琶を弾いている僧。

それらは、心の中にネガティブなものや割り切れないものがあるときに現れ、自己の気持ちをポジティブなものに変えてくれる作用を持っていた。

## 6. 小編『武蔵野』の位置づけ

表1を再び参照する。単行本『武蔵野』は1901年に出版されたが、この本は1896年頃から雑誌『国民之友』等に発表された種々の原稿を集録したものである。国木田の小編『武蔵野』は、ノンフィクションとして受けとめることができる著作である。一方これまで検討してきた『忘れぬ人々』は、フィクション(もしくは

novel)として見ることができる内容である。表1に示されているように単行本『武蔵野』の中での最初の小編は1896年の『たき火』である。それ以前から国木田が書いていたものとして『欺かざるの記』がある。国木田は1893年からこの日記を書き始め、1898年に書き終えている。もともと出版される予定ではなかったが、没後に出版されてしまった。1896年9月からは国木田は東京渋谷に住み始める。この日記の後半部分(1896年～)から当時の国木田の実生活を知ることが出来る<sup>12)</sup>。渋谷に移り住んだ最初の頃は、失恋を思い返す日々ではあるが、来客者がいたり、教会に出かけたり、輪読会に参加し(輪読会で国木田は今井忠治がツルゲーネフの小説を講じるのを聞いた)たりして、知人との交流はある。移り住んだ周囲の自然の姿は国木田の目に次第に映っていくようになる。最初は、家の周囲にある自然が感じられ、次第に積極的に時間をかけて自ら散歩を始めるようになった。散歩は一人で行った場合もあるし、宮崎湖処子と二人で出かけた場合もあった<sup>13)</sup>。

小編『武蔵野』には日記からの引用文がある。引用されたのは1896年9月7日から1897年1月21日までの分の実際の日記の中からの、22日分にわたる内容である。その引用元となったのは、『欺かざるの記』である。国木田はその日記に自然について気がついたことを書き留めていた。その中から自然について記録してあった部分をそのまま引用するのではなく、アレンジしたかたちにして小編『武蔵野』で引用している<sup>14)</sup>。

『欺かざるの記』の1896年の10月26日には、「『武蔵野』の想益々成る」として小編『武蔵野』の構想がすでに出来上がりつつあることが記されている。そして同日の日記のより後の部分には、

ああ、「武蔵野」。これ余が数年間の観察を試むべき詩題なり。余は東京府民に大なる公園を供せん。

という記述がある。この14ヵ月後に小編『武蔵野』が発表される。国木田は、ここで、「詩題」である武蔵野は将来文章によって表現されることになり、それが東京府民にとっての「公園」になるということ意識している。「供せん」としているのは物理的な意味での公園ではなく、詩的表現を通じて生け捕りにされた、人々の記憶に残っていく<イメージとしての公園>のことである。国木田には、物理的対象を表す用語を、このように形而上の対象を指す言葉として使う感性があることが分かる。失恋の痛手を抱えていたので、人の気持ちという当てにならないものよりも、もっと信頼できるものを自然の姿に見つけようとする。しかし、やはり時折衝動もしくは幻影のように相手の女性のことが思い出され、日記にはそれを書き残す状態が続いていた。この恋の破局から受けた衝撃について、全ての部分を書き換えられたわけではないが、国木田は次第に「人生の不思議」としてこの件に認識上の書き換えを行っていく。そして1897年の5月、「源叔父」の執筆が(3回書き直しをした)完了したところで、この日記は突如として終わる。1897年3月には次の言葉がある。



神を知らんと欲して、ただ自然を見るは大いなる誤謬なり。不思議なるは、自然のみにあらず、実に人生そのものなり。人生の不思議を感じずして、神を知らんと欲するは大いなる誤謬なり。

これは、崇高なものを見ようとして自然を探求することが、人間の関わる出来事を見つめることと併せて行われなければならない、と指摘しているものと読み取れる。

## 7. 『忘れえぬ人々』と小編『武蔵野』

『忘れえぬ人々』は、小編『武蔵野』の後に発表された小説である。本論ではあとに作られたものから、先に作られたものの特徴を探っていくとしている。『忘れえぬ人々』において、心に残って忘れられない人、というのは、深いコミュニケーションが行われた人々ではなく、旅先で遭遇した人々であるが、磯を漁る男、馬子、琵琶僧というのは、その場面を思い出すための鍵となるものにしか過ぎず、忘れえぬ対象になっていたのは、これらの人々が登場したときの周囲の状況や、これらの人々が心の中に想起させるイメージであったりした。忘れられないのは、人々であり、その周りの風景であり、その人が登場するにいたるまでの状況全体である。それは、柄谷が言うように、誰か他者によって規定された「名所」とは関係がない。そのようなものからは切断されている。自己の心の内面に関心がある人間にとって、ふとその心境に変化をもたらすものが『風景』である。理想的には、ネガティブなことをイメージしている内面にとって一服の清涼感を与えてくれるものである。そのような『風景』は、自己の外側に存在するものであるが、それは、あくまで主体の側が任意の場所において実感することによって見出すものであり、決して所与と与えられているものではない。これに気づいたり表現したりするためには、自分が内面で何を感じているのかを表現できなければならない。そこで言文一致が関係してくる。

とするなら、小編『武蔵野』において、なぜ国木田がナラの木からなる落葉林の美に気づくことが出来たかを想像すると、図1が示唆するように、この落葉林が、人間が生きていくこととのつながりがあったからではなかろうか。それは、国木田自身の失恋の喪失感を和らげて、詩人として生きていくことを決意させた場所であったからであるかもしれないし、昔は萱原で有名であった場所が、江戸時代に入って薪炭をとることが生活に必要になってきたのが目の前に見える雑木林であったからであるかもしれないし、この落葉林が点在していることによって、人の暮らしと自然とが交互に展開するような仕掛けになっているところが面白いと感じたからかもしれないし、それら全部でもありうる。

国木田が愛読したツルゲーネフの『あいびき』は、猟が行われるような白樺林の中で、一組のカップルが男の側の事情によって別れなければならなくなった状況を描く。白樺林は、人間のストーリーが展開する舞

台である。『あいびき』の原文タイトル“СВИДАНІЯ”は、「デート」を示すロシア語である。“До свидания”とすれば、もう一度会うまで、というニュアンスを帯びて、「さようなら」という意味で使われる。国木田は、小編『武蔵野』の林中の自然描写において気になっていた人の姿を完全に取り去っているように見える。国木田は『あいびき』の物語とは反対に、女性の側から別れを告げられるという体験をし、周囲の自然に対して精神的な救済を求めて分け入っていたところがある。しかし、このことは小編『武蔵野』の中に書かなかった。詩人として立たねばならぬ部分だけを抽出した。私生活で起こった出来事は、文学活動のインスピレーションになったので、フィクションの場においては形を変えて用いたが、ノンフィクションの形をとる小編『武蔵野』では、意図して表現から除外しているようである。国木田はツルゲーネフの小説中の白樺林を目前のナラ林に読み替え、ツルゲーネフの小説中の男女の出会いと別れの物語を知っていながら、自分の体験した別離の感慨といった要素をここでは一切表現せず、ナラ林の林内の様子だけを一人称で書き残した。つまりナラ林の美について記した箇所では、図1のモデルでいえば右側（風景）の要素だけを描いたのだと言える<sup>15)</sup>。ツルゲーネフの『あいびき』とは、反対のことが自分の身上に起こったことを自覚していたかどうかは分からない。このような情報の加工は、デザインの世界の中で起こる形態的操作に類似する。既存のものに対して新しい要素を付け加えようとするとき、既存のものを逆さにしたり、その一部を別のものに置き換えたり、ある部分は既存の部分を除外したりすることが行われる。

## 8. まとめ

『忘れえぬ人々』の中に描かれた内容を吟味することによって、武蔵野のナラ林の美に気づいた国木田の感性を探ってきた。大津が書いたとする『忘れ得ぬ人々』には、「風景としての人間」が描かれており、その奇怪さは最後に「亀屋の主人」を書き込んだ主人公の奇怪さに集約されているというのが柄谷の指摘であった。「風景としての人間」というのは、『忘れえぬ人々』を読み解く上で手がかりになる概念であった。しかし、国木田の奇怪さは、「風景としての人間」という概念では言い表せないと考える。作家の不可解な側面は、この言葉の中に収まらぬ描写を生み出していた。風景としての人間という言葉の意味は、「哺乳類としてのヒト」という場合のように、風景と人間の間にある包含関係を示すものではない。風景と人とは別のものである。本論ではこの二者の関係は、両者の結びつきが強いために、どちらか片方だけを抽出することができない図1のモデルとして表現された。登場した忘れえぬ人々は、確かに主人公の目の前に現れはしたが、決して主人公に個別に働きかけてくることはなく、彼らにとっては日常のいつもの仕事を継続させていたに過ぎない。それらの人々は日常生活を送っているだけであるにもかかわらず、それを見る側の自分が旅人であり、しかも、

平常とは異なる気分になっているときに、その気分を救済してくれるようなタイミングで出くわしたために特別なものに見えている。国木田にとっての忘れえぬ人々とは、社会的に既に認定されている価値ある対象ではなく、あくまで個人的な事情で認知されるものである。この点で小編『武蔵野』では名所や旧跡と切り離された対象としての風景を国木田が発掘しているという柄谷の指摘は人物についても言える。旅人の目は、当人から直接干渉を受けることがない状態にあるとき、それらの人々が活動している周辺の風景までゆっくり見える。風景とは、巻き込まれていない、心理的距離感のある対象である。

『忘れえぬ人々』は、文字通り忘れることができない人々を描こうとしたのであるにも関わらず、それに景がくっついてしまっている以上、忘れられない風景を描いたものになりえている。一般的に、風景は視覚情報に多くを依存した情報である。しかし『忘れえぬ人々』の中で忘れえぬ対象となっているものには、聴覚的情報や目に見えないイメージ空間まで含まれている。そのことが、「風景としての人間」という概念を軽やかに超えてしまっている国木田の不可解さである。その風景も、その場所にあってはありふれたものであるかもしれないが、旅人の抱えている問題を消し去る方向で作用する人間を輩出したために、ポジティブな気持ちを伴うものとして記憶され、忘れることが出来ないものになっている。

つまり『忘れえぬ人々』と題されたこの小編では、主人公の大江が忘れ得ない人々について説明をし始めたが、その説明は<人間>について表現されるものと思われたが、本当に忘れることが出来なかったのは<人間>そのものではなく、その人間が作り出した視覚的効果や聴覚的効果であり、またはその人間が登場することによって喚起されたイメージであることが示されている。表現したかったものと表現しえたものとの間にずれが見られるということだ。忘れえぬ「人々」についてこれから話すね、と言って親切な前置きとともに語られはじめたものであればあるほど、そのずれが不可解さを増して見えてくる。

国木田のもつある種の価値の転倒はしかし、価値を転倒しなければ生存を危ぶまれるほどの心理的外傷があったからであるとも推測できる。そのような出来事を生んでしまった原因は、自己に由来するものであると他者からは気楽に言うこともできようが、本人にとってはその自己が見えていない。そのため、一人称で語る小編『今の武蔵野』では、林の中に自己の安全を確保する閉じられた世界が描かれる。自分のことについて知りたい感性は、林の中に訪れてそこに展開する様々な外界の変化に耳を澄ませる。外界の現象であるけれどもそこで、内面を写し見ている。しかし、フィクションの形をとる文体の中では、自己の内面で起こったことを登場人物という他者に託して展開できるので、整理されない感情を様々な形で吐露することが出来る。そうして感情的なものを文章に置換している自分を、客観的に眺める視点を確保できる。

『忘れえぬ人々』では、人について描こうと思ったのに、その背景にある視覚的情報、聴覚的情報、また

それらの情報から派生して喚起される頭の中だけに出現するイメージ世界にまで広がってしまったのは、それらが別々のものではなく密接に結びついているからである。同様に、小編『武蔵野』で、ごく平凡なよくある風景に価値を認めることができたのは、その風景が単に風景として独立していたからではなく、国木田にとってその風景が、人間の生きる姿に結びついていたからに違いない。もし柄谷の言うように、人のことにはさほど関心を持たず、自分の内面に焦点を当てているのが国木田の特質であるとするなら、武蔵野の楢林を素晴らしいものとして評価することができたのは、そこに好ましい自己の姿が投影されていたからであろうと推測できる。

## 要約

本論では、国木田独歩の『忘れえぬ人々』を柄谷行人の『近代日本文学の起源』を参考にしながら読み解いた。国木田が『忘れえぬ人々』において、「風景としての人間」を描いているという柄谷の指摘を筆者なりに再考した。その結果、『忘れえぬ人々』は、風景と切り離しては表現することができない特殊な人間、について取り上げたものであるがゆえに、忘れられない風景について描いたものになりえていることが分かった。注意深く読むと、国木田にとって忘れえぬ対象となったものは風景の範疇を越えていた。文中で、忘れえぬ人として紹介された人物は、見る人間の側が抱えていた心理的状况に対してポジティブな変化をもたらした人物であったことが分かった。『忘れえぬ人々』を読み解いた視点を小編『武蔵野』に応用すると、国木田が東京郊外の、当時は平凡で美的に価値があるとされていなかった風景のよさに気がついたのは、そこに人間の存在が感得できたからである。風景と人間が密接に繋がっている場に国木田の視点は引き寄せられる。柄谷のいうように、極端に自己の内面に関心を持つ人間が、武蔵野の風景の美に気がついたということは、その風景に自分という人間の中に見たい美点が反映されていたからであろうと推測できた。

## 補註

- 1) 小野良平 (2010) : 用語「鎮守の森」の近代的性格に関する考察, ランドスケープ研究 73(5), p.673. 小野は、「独歩の「武蔵野」や「落葉林」が、近代的な「風景の発見」であったことはすでに一定の理解となっている。」としている。小野が参照したのは、柄谷行人 (1980) : 近代文学の起源, pp.5-43, 講談社, である。補注2) の文献によって確認したところ、このようなことを直接表現した箇所は柄谷の文章の中に存在していなかった。『武蔵野』の中の、どの要素を柄谷が「風景」として見ているかは、柄谷の文中に明示されていない。したがって、小野による上記の抜粋部分において「『武蔵野』や「落葉林」が…」というふうに「落葉林」を鉤



括弧で取り出しているのは、pp. 5-43 の中から読みとった小野の解釈であると思われる。

- 2) 柄谷行人 (2009) : 日本近代文学の起源 原本, 講談社. 柄谷によれば原著は 1975 年から 77 年にかけてイェール大学で研究員として明治文学を講じていたときに彼が構想した批評である. 初版は 1980 年に講談社から出版された. 本論では 1980 年版の中身を 2009 年版で確認している. 1980 年版は著者の意図していなかった反響があり, 英語, ドイツ語, 中国語, 韓国語に訳された. 最初の構想を残した『日本近代文学の起源 原本』と, 後に機会を得て全面的に改稿した『定本 日本近代文学の起源』<sup>3)</sup>がある. 前者の出版後, しばらくして英語翻訳をしたいという申し出があり, 1991 年に前者の末尾に新たな 1 章を付け加えて, 英訳に応じた<sup>4)</sup>. 「定本」は, この英訳された原稿に, さらに 2004 年に全体にわたって内容の改稿をほどこしたものである. 前者を原本, 後者を定本として本文中に表記する.
  - 3) 柄谷行人 (2008) : 定本 日本近代文学の起源, 岩波書店.
  - 4) Karatani Kojin(1993) : *Origins of Modern Japanese Literature*, translation by Brett De Bary, Duke University Press. 「風景としての人」を “people-as-landscape” と訳している.
  - 5) 筆者は, おそらくそのような見方を拒むであろう. 核となる概念が存在することや, 中心性のある議論をしているように見えないようにするために, これらの固有名詞を散りばめたのかもしれない. そのような連想が働いたのは, 磯崎新と柄谷行人の言説の間に関係性があるからである. 柄谷と磯崎は後年, お互いの仕事を参照しあったり, ともに海外で作品について論じ合ったりしている. 磯崎は『建築の解体』(1975 年美術出版社)において, 当時, 建築はもはや従来の建築と異なるものになってしまったと主張し, 海外建築家 7 名の作品を参照しながら, その変わりつつある諸相を書きとどめた. その末尾に, 「主題の不在」という項目を付けている (柄谷の『定本 日本近代文学の起源』第 7 章のタイトルが「ジャンルの消滅」であることに注意). 磯崎の書く文章と柄谷の書く文章の間には, 同じキーワードがある. 以下に例示する. 単語として同じものが用いられているというレベルでは他にも挙げることができる (例, ユーモア, アイロニー) がそれらについての詳述は割愛する.
- 例 1) 「漱石にとって, 「漢文学」はもはや実体 (下線岡島) ではなく, 近代文学の彼岸に想起されるべき不確かな何かだったのだ。」(柄谷) 磯崎新は彼の体験したいくつかの事柄 (戦争, 安保闘争, 血のメーデー) などに関して, 「ぼくをとりかこむ実体 (下線岡島) が次々に崩壊, いや消滅していく事件ばかりであった」とし, その状況を物語るものとして, 「溶解」, 「虚像」, 「流転」, 「非現実的」, 「不確実」などの言葉を使っている. やがてこれらの言葉を表象するような

建築作品を作り始めた. もしくは自作品の中からこうした概念の表象とみられる形態を指摘した.

- 例 2) 「国木田独歩の『武蔵野』を特徴づけているものは, 風景が名所から切断 (下線岡島) されていることである。」(柄谷)
- 例 3) 「国木田独歩の新しさは, そのような切断 (下線岡島) にある。」磯崎新の代表作となった大分県立中央図書館 (1962 年) (図 2 参照) はプロセスプランニングという手法が駆使されたものであるが, そのデザインに「切断」という手法が用いられた. 磯崎によって表された「切断」は伸びていく建築部位のエレメントが突然断ち切られるデザインとして提示された. そこでは, 断面の露出が効をなす. 磯崎の「切断」は形態デザインとして明示されるものであり, 国木田の「切断」は形態デザインとして確認できない. 両者は純粹に言語上の同一表記であることに留まる. 「切断」を造形として見せるために, 図 2 のように, 連続的に流れていく時間を, 梁に見立てた直方体 (細長い線) として表し, 突然の時間の切断を, 無意味な場所にまでのびた直方体の突然の終焉として示した. 突然に終焉してしまったことを効果的に示すために, 断面を空洞にして影が断面を強調するようにしてある. 殆ど職人的な, 無意識的に行われるデザインという行為に抵抗し, いかにか意識的な操作を加えるかという問題意識が当時の磯崎にはあった. 無意識にデザインしてしまうことを, 職人としての経験知から来る手の慣性運動と表すなら, それは単に慣習を表すこと, すでに習得してしまったことを繰り返す手の動きにしかならない. 理性は無意識に行うことに抵抗してそれを排除し, 自覚した意識の元で, 既存のものとは異なる

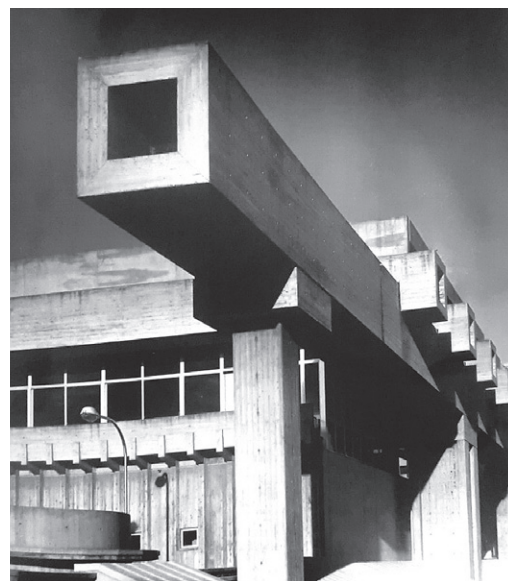


図 2. 大分県立図書館の画像

るデザインを描き出さねばならないとした。当時の磯崎には、自らのアイデンティティーを示すために、メタボリズムの流れには与していないことを表明する必要性もあった。

ユーモア、アイロニーなどのポキャブラリーについては、岡島直方(2008):イソザキアラタの「建築の解体」の来歴と成果,南九州大学研報 No.38A:31-38を参照。図2の出展は、二川幸夫(1991):磯崎新 1959-1978, A.D.A.EDITA Tokyo,p.43による。

- 6) 単行本『武蔵野』に集録された小編の中で、初出年代が分かっているものを順番に並べたものが表1である。表1から分かるように、『今の武蔵野』は、明治31年の1月、2月に発表されたが、それ以前に発表されたものに『たき火』(明治29年11月),『星』(明治29年12月),『源叔父』(明治30年8月),『おとずれ』(明治30年11月)がある。これら4編において、いかに「風景」の発掘に関連する内容が描かれているかどうかを検証するのは興味深いテーマである。
- 7) 本論では国木田の著書の参照は、すべて国木田独歩(1996):武蔵野,岩波書店(71刷)を用いている。
- 8) 不思議にも、というのは語り手(ナレーター)の私見である。この小説の語り手は単に起こった出来事を伝えるだけでなく、このように時折顔を出して、読者に何に注目してもらいたいかを示唆する。
- 9) あたかも文よりも話し言葉の方が伝わる、と言っているかのようである。言文一致との関係性を想起させられる描写である。
- 10) そこで登場した人々とは、当時としてはありふれた人であったかもしれないが、獵師、馬子、琵琶僧はいずれも特殊技能を持つ人々である。
- 11) この、始まりそうで始まらない状態の滑稽さは、チャップリンのモダンタイムズにおけるレストランでのシーンを想起させる。歌詞をかいたカフスが、序奏のダンスで飛んでいってしまっパフォーマーが時間かせぎをしている場面である。観客は早く歌を歌ってほしいのに、演者はぐるぐると中央部分を回っている。
- 12) この日記の内容は、本論では、国木田独歩(1999):欺かざるの記抄,講談社により確認した。同書は国木田の「欺かざるの記」の全文のうち、1895年から最後までを全文収録している。同書によればこの時期は独歩の思索と恋愛体験が最も高揚した時期である。
- 13) 例えば10月22日には夕方四時から「宮崎君」といっしょに散歩して、夕陽の美しさに感動している。翌日は朝から二人でいっしょに野を散歩して林に座る経験をしている。
- 14) この時期に国木田は、徳富蘆花に自然の日記を書いてみたら面白いだろうと、すすめている。それがきっかけで、徳富は1898年の元日から大晦日まで一日も欠かさず毎日の自然の見聞を書き続けた

という。これが当時ベストセラーになった単行本『自然と人生』の出版につながる。徳富蘆花(1994):自然と人生,岩波書店,p.250。

- 15) しかしここで、あえて、図1モデルの左側の要素(人の要素)が、本来は存在していたはずだというふうに考えた場合、どのようなことが言えるだろうか。この別離の物語ではなく、武蔵野の風景をポジティブに捉えるきっかけとなるような、良い印象を国木田に与えたく人が関係する場面>があってもよさそうである。そこであらためて『欺かざるの記』を調べることにする。すると、1985年8月11日に、国木田は佐々城信子嬢と国分寺まで「汽車」で行き、車に乗りかえて小金井の橋で降り、そこから水の流れに沿って桜橋にいたる道を散策したことが分かる。およそ3.3kmの散策である。日記によれば、桜橋からは「境停車場」へ歩く途中で林に向かう道を進み、その林の中で二人はお互いを思う気持ちを表現しあった。「林間に入り、新聞紙を布て坐し、腕をくみて語る、若き恋の夢!」とある。林の中の様子として「日光、緑葉にくだけ、涼風林樹の間より吹き来る。」、「林は人間の祖先の家なりき。」の表現がある。8月24日は、二人は今度は、(武蔵)境の停車場からアクセスして桜橋近辺の同じ林(現在の武蔵境の駅から0.8km近辺)にやって来て、「楽しき林間の幽路に入りたり。」と記されている。桜橋近辺にあった林とは、地理的な観点から推測すると、楢の木を中心とした落葉樹からなる林(後に徳富が「雑木林」と呼んだ種類の林と捉えてよかろう)であったことであろう。わざわざ郊外までやってきたということで、この林は二人にとって特別なデートの場所となったと言える。これを踏まえて小編『武蔵野』を確認する。すると、小編『武蔵野』は、一律に武蔵野のすばらしさを述べているものではなく、章によって描く内容が整理され、分けて述べられていることに改めて気づかされた。第二章から第四章までは、主に秋から冬の武蔵野の林のことについて述べていて、一人称で語られている。自然を観察している主体は「自分」一人である。場所は澁谷村の近くが主となっている。第六章は夏の林のことについて述べられている。第六章は「ある友」といっしょに二人で境の停車場から桜橋へ、小金井の堤から水上の方に向かって歩いたときのことを記している。自然を観察しているのは「自分」と「友」の二人である。その時のことを「ああその日の散歩がどんなに楽しかったろう。」としている。小編『武蔵野』公表の3年前の夏は、ちょうど上の日記の時期にあたるので、ここでの「ある友」とは信子嬢のことを指しているのではないかと考えられる。これは、図1モデルが示唆する、風景が描かれるにあたっては、それとつながった「人」の存在があるはずではないかという仮説を適用して国木田の叙述を見直した解説である。図1のモデルがなければうまく拾い出せなかったデータであった。小編『武蔵野』とは何であったかを今後

さらに考えていく際のきっかけになるデータである。小編『武蔵野』とはノンフィクションの形をとった一種の抒情詩であるということができそうである。なお、本論文中の7章で小編『武蔵野』について指摘した箇所は、一人称叙述からなる第二章

から第四章までの部分についての読み取りということになる。この箇所は、日記と呼応させてみると、すでに信子嬢が去っていったあとの気分でえがかれていて、秋から冬にかけての、落葉期の楢林の景色の美しさについて描かれている。